

1993年4月15日発行 1975年2月28日第3種郵便物認可
毎月1回15日発行
定価／150円
年間購読料／2,000円
(送料共)

編集／緑の地球ネットワーク(準)
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739 (番552)
郵便振替 大阪4-128465
COM21 通巻309号 発行／COM企画室

緑の地球 **GREEN EARTH**

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- 緑の地球ネットワーク結成・会員総会………P 2
- 緑の地球ネットワークシンポジウム………P 3～6



1993・4
15

GEN、正式発足！

地球環境のための国境を越えた協力をより発展させよう！



緑の地球ネットワークは4月11日、アビオおおさか（大阪市中央区）で、結成会員総会を開いた。近畿はもちろん、広島、高知、中国からの留学生ら、約60人が出席。会則、結成アピールを満場一致で確認。「ネットワーク」の文字どおり、自分の意志で参加

し行動する個人が結びついた新しい会が発足した。

まず、高見邦雄さんが準備会の一年間の活動を、黄土高原での緑化協力を中心に報告した。その後、佐野茂樹さんが「我々の旺盛な活動が地球の命を危うくしている。食いつぶす営みではなく再生の営みを始めよう。緑を取り戻し、水、土を保つ。山西省、ヒマラヤで緑化協力を進める。さらに、全世界の村々の生活に触れ、共に環境を修復しよう」とあいさつし今年度の計画を提案した。

続いて、川島和義さんが会則を提

案、満場一致で採択した。佐野茂樹さんら20人の世話人も確認し、代表世話人に佐野さんを選んだ。最後に東川貴子さんの読み上げた結成アピールを拍手で採択し、閉会した。

● G E N 世話人

佐野茂樹（代表世話人）

磯川佳子／岩山春夫／太田房子／岡田光司／川島和義／加茂わか／白形光江／祖谷公子／高見邦雄／巽 良生／竹田幸子／武田繁典／東間 徹／中島あかね／西山五郎／林 靖介／東川貴子／深尾葉子／村上次郎

緑の地球ネットワーク会則

(1993年4月1日制定)

は、会の運営費用と区別し、他の用途に用いません。会計年度は毎年4月1日から翌年の3月31日までとし、年度ごとに監査結果とともに会員に会計報告します。

【付則】

①会費はつぎのとおりです。（いずれも年額1口）

一般会員	12,000円
同居の家族会員	6,000円
学生会員	3,000円
ジュニア会員	1,000円
賛助会員	100,000円
会報購読料	年額2,000円（会費には購読料が含まれます）

団体会員 一般会員と同額
(可能であれば3口以上)

②事務所の所在地などは世話人の決定で変更できることとします。

盤そのものが失われつつあります。
「南北」の分裂と不平等がこれ以上拡大するとき、そのいずれもが滅びるしかないでしょう。
環境に国境はありません。地球はますます小さくなっています。私たちは

もいまや多数派であり、それを具体化する道を探らなければなりません。

地球のもう一方には、環境破壊と貧困の悪循環に苦しむ人たちがいます。
なかでも森林の消失による環境悪化によって、広大な地域で人びとの生活基

緑の地球ネットワーク結成アピール

かけがいのない地球が深く傷ついています。大量生産と使い捨ての社会は、豊かさ・便利さを実現したようにみえながら、じつは生命そのものの危機をもたらしました。「ライフスタイルの転換が必要」という人は日本で

2



自分の足元で緑を守り、緑とともに生きることを追求するとともに、地球環境のための国境を越えた協力をめざします。とりわけ、水土流失・沙漠化・洪水と生存をかけてたたかい、森林をとりもどそうと努力している人びととしっかり結びつきたいと思います。地球のどこかで再生する緑は、ときがたてばたつほど、その意味を明瞭にするでしょう。

準備会のこの1年、私たちは中国黄土高原で協力を具体化し、またネバー

ルでも可能性を追求してきました。私たちのネットワークが広がり、深まれば、より多くの地域と協力関係をもつことができます。新しい共生、新しい循環の可能性を求めて、一步をふみだしましょう。

緑の地球ネットワークが求めるのは、自立した諸個人の多様な結びつきです。いま環境のためになにをすべきか、一人ひとりがその気になればできることはたくさんあります。まずは自発的行動し、お互いに尊重しあい、

信頼の原則のもとに新しい広がりをつくりだしましょう。

緑の地球——21世紀に可能性を生み出すために！

1993年4月11日

緑の地球ネットワーク会員総会

GEN発足賛同者のお名前

(4月29日現在 167名)

楊田 幸弘	いいだもも	井口 昇司	磯川 佳子	板谷 一夫	市川貴代子	大城戸晴美	大塚 瑛子	大東 弘
奥村 菜穂	貝原 久	香川 明子	門田 明輝	川島 和義	川中 正浩	河村 智子	肘付 康孝	相良 文三
桜井公三子	鈴木 七郎	蘇 建源	田中美代子	田中 隆一	茶谷 靖司	鳥谷 行俊	長崎美代子	成島 忠夫
波田地浩志	東川 貴子	平坂 春雄	藤枝 融	藤谷 卓志	松井 義子	向川 郁郎	村蒔 義生	村蒔 義正
山田 孝子	山本 修子	吉田 恭子	米津 とみ	羅 紅光	六島 純雄	渡部 昌子	(匿名1名)	

緑の地球ネットワークシンポジウム



「緑の地球ネットワーク」の正式発足記念シンポジウムが、結成会員総会当日の4月11日、ピースおおさか（大阪市中央区）で開かれた。シンポジウムは2部に分かれ、第1部の環境コンサートでは、NHK「美の回廊をゆく」のテーマ音楽などで知られるシンセサイザー奏者、矢吹紫帆さんが緑のメッセージを奏でた。第2部のシンポジウムのテーマは「なぜいまアジアの緑か」。京都精華大学教授で「使い捨て時代を考える会」の梶田勤さん、

「アジア自然塾」塾頭の稻村昭南さん、京都大学助教授で「日本カザフ研究会」を主宰する石田紀郎さん、大阪外国语大学講師で中国の環境問題に詳しい深尾葉子さんの4人がそれぞれの分野から問題提起した。約300人が入る会場は立ち見こそなかったが、ほぼ満員。10、20歳代の若者の参加者が目立った。会場からは質問だけでなく意見も多くされ、約3時間の討論はあつという間に終了。「国境を越える緑の風」が吹き始めた。

●地球環境ブームの危なっかしさ
——梶田さん



近ごろ、環境ははやりのようだ。しかし、はたして本質的に大事な問題として環境問題を盛り上げているのか、あるいはブームのようにうかがっているのか、この辺を考えてみなければならない。

「地球に優しく」「地球を守れ」という言葉にはいかがわしさ、偽善のにおいがある。これは環境ブームといわれる今の風潮の上っ調子さ、危なっしさと結びついている。「環境ODA」も既に間違うことを見定されている道筋において、準備が進んでいる。

ブームに流れる危なっしさは、私達の足下の現実、暮らしを離れて論じられるからだ。地球環境というと炭酸

〈次頁につづく〉

ガスの温室効果とか、フロンガスがどうのとかと言われる。たしかにそのことは大事だ。しかし、つかみどころのない、文字どおり空気のような話に流されていたのでは、大地に根をはった緑の世界、人々の生きざま、幸せが忘れられてしまう。

北の人々の豊かさの追求と浪費ライフスタイルが環境破壊をもたらすと言われる。もっともで、我々は反省しなければならない。しかし、北の人々と一般化し、その中に自分がいることを忘れてしまい、外から正義を主張すれば、恐ろしいことになる。北の人々一般の問題ではなく、私たち一人ひとりの問題だと考えないと足をすぐわれる。緑が消えていくこと以上に、そこで生きてきた人々の暮らしが破壊されていることを考え、自分たちの暮らしと結びつける。のっぺらぼうな人間の問題ではなく、顔と心を持った一人ひとりの人間の幸せにつながっていることを考えるべきだ。

緑は生存の基盤で、緑によって多種無数の命が共に生き、その自然によって私達は生きることを許されている。それを大切にできない金と物とにふりまわされてうかれている文明社会を変える必要がある。海外に出かけて一本一本木を植えることは、そこに生きる人々の喜びと悲しみに触れることにつながる。それは私達の現実をかえりみ、生き方を変えていくだろう。

●日本の失敗から学ぶ

人間と水の関係——石田さん



20世紀の人類最大の環境破壊といわれる中央アジア・カザフスタン共和国のアラル海の問題を取り上げる。出口のない尻無し湖で、面積は北海道を少し小さくしたぐらいだった。しかし、旧ソ連時代の1940年代末以降、ここにそぞぐ河川流域の砂漠の中に運河を引いて綿畑を作った。日本の水田面積の

吹きぬけた緑のメッセージ

矢吹紫帆さんシンセサイザーコンサート

真っ赤な“着物”
に錦織の“けさ”、
金色の冠を着けた矢
吹さんがステージに
現れた。古代の女王
のような衣装に会場
からは一瞬、驚きの
溜め息。夫の矢中鷹
光さんとのボイスフル
ド、大正琴のシン
セサイザー版を使つ

た曲、会場参加者からの題で即興演奏
した「火星」。明るいリズミカルなも
のから、幻想的な曲、悠久の自然を感



矢吹紫帆さん(左)と矢中鷹光さん(右)

じさせる曲まであり、約45分間のコン
サート中、会場は日常から離れた雰囲
気につつまれた。

3倍程、約900万ヘクタールという大
規模なものだ。それでアラル海に注ぐ
水がなくなり、干上がりだした。今は
四国より少し大きいぐらいまで小さく
なり、あと15年で湖がなくなると言わ
れている。

アラル海の消滅は、大きく言えば地
球規模の環境変化に影響を与えてい
る。それに現地では湖が干上がった砂
漠で塩分を含んだ砂嵐が綿花地帯を襲
い、綿花栽培が不可能になった地域も
ある。また、農薬も問題で、乳児死
率も日本の約20倍。千人のうち92人が
死ぬ。村によれば2人に1人が死んで
いる。この現実は旧ソ連の時には明
らかにされていなかったし、今もなぜ
死ぬのか、農薬がどれほど母体に影響
を与えてるのか、井戸水がどうなっ
ているのか明らかになっていない。漁
民は海から離れた。何十万人も移住
し、年寄りと子供だけが残された村も
たくさんある。飲料水は飛行機か車で
運んでいて、1日2リットルしか飲み
水がない村もある。

日本は1年間で1600ミリから1800ミ
リの雨が降る。日本が公害先進国だと
言われながら我々が生きてこれたの
は、日本の技術じゃなくて雨のおかげ
だ。汚い川も一雨降ればきれいにな
る。海へ流すことで生きてこれた。と
ころが、カザフは年間100ミリから2
00ミリしか雨が降らない。日本での水
と人間の関係。その中で私たちが失敗

してきたこと、水俣病を始め、いろん
な公害。その失敗例を雨が少ないとこ
ろに伝えていく。その作業が水と人間
の関係を模索することになるし、国境
を越えて、日本人としてやらなければ
ならないことだ。

●下流から上流への流れを

——深尾さん



黄土高原の森林破壊は3~4000年の
長いタイムスパンで進んできた。気候
変動もあるが、かなりの部分は人為的
な要因、文明的資源調達と過放牧、漢
族と少数民族の重なりあう地域だった
影響で破壊が進んだ。今も破壊は続
いている。雨は年間400ミリと少ない
が、夏に集中的に降り、表土を洗い流
す。その積み重なりで耕地がどんどん
減る。経済的にも非常に厳しいなかで
人々が住んでいる。

ある意味で、私達はそういう川の下
流に住んでいる。上流の人々は過去の
負の遺産を受け入れながら、そして自
分たちもその負を繰り返す悪循環のな
かで生活している。こういう所へ、過
度に物質的な享受をしている私達が突

然降りたって突如木を植える。ある地域では迷惑になるかもしれない。非常に傲慢な自己満足になってしまう不安がある。

このことをずっと考えていたが、最近、自己満足だということを徹底的に認識したほうがいいと思うようになった。謙虚な自己満足として動いてみることが大切だ。

中国の奥地の若い人達は、機会があったら大都市に出たい、外国に行きたく思っている。日本は憧れの地だ。水と土の流れ、そして栄養も人々の意識も外へ外へと流れていくような所へ、下流、富もお金も世界から集まってしまう先進国と呼ばれる地域の人間がボーンと飛んで行く。彼らが下流に向かう意識が眞実なら、私たちが上流に向かうのも一つの実体として認めたらいい。そういう地域にひかれて何かしたいと思うのも、自然の調節作用の一部分だ。下流から上流に上がる人間がいないと、一方的な流れになってしまう。

この際一番大切なのは、短期的でなく、長期的につながること。同じ時代を共有して違う条件の中で生きている人たちを実際に自分の目で見、自分が変わっていくための糧を得ることだ。よかれと思ってやったことが、かえって地域にマイナスの要素を与えるかもしれない。それでも、やってみよう。

●人間は地球の声を聴く

レシーバー——稻村さん



ヒマラヤに憧れネパールと長い付き合いが始まった。標高5000メートルまでの生活圏の人は、僕たちの生活からみると着る物も食べる物も貧しい感じがある。だが、とぎすまされた感性、人を人として扱う優しさ、完成された人間の姿だ。

ネパールで医者をしていた岩村昇と出会い、ヒマラヤ山中を注射液を持

ち、便所を掘る旅が始まった。乾期は素敵なネパールも、雨期は本当に切ない。崖崩れ、洪水、伝染病、多くの人が死ぬ。ある日、コレラがはやった村に行くと、あまり人が死んだようではなかった。薬を投与し、井戸を消毒した。安心して隣村に行くと、大半が死んでいた。薬を使い果たしていたので生き残った者も助けられなかつた。衝撃だった。それから、人の為にということに疑問を持つようになった。それまでは、2人とも気持ちのいい仕事だった。注射液を持って行く僕たちをおがんしてくれた。自分自身を見失っていた。日本の価値観でネパールの人の生活を計っていた。僕たちと同じであれば幸せだと感じてしまっていた。

日本に帰り農村改善に必要な技術を習得し、ネパールへ戻った。村の人は優しかったが、日本人が背負っている経済力に期待しているからだった。水道を作ろうとしたが、日当を払わないと働いてくれない。その時、相手側に矛盾を感じた。実は僕の矛盾だったんだが。

●会場からの発言もはじめて

若者の参加者が多かったせいか、約1時間半の質疑応答では、「学生としてどういう活動ができるのか」「当事者性をどう考えたらいいのか」など、率直な質問が相次ぎ、パネラーが答えに窮する場面もあった。質疑応答、意見の一部を紹介する。

——アラル海は灌漑をやめたら解決するのか？

石田 規模を小さくするとか、作物の種類を変えるとか考えられる。たったひとつ解決策はない。地球規模的にも同じで、いろんなこと、生活も入れて、方法をとるべきだ。

——アジアの人に学生としてなにかするにはどういう方法があるか

稻村 嫌いな言葉は「アジアに捧げる」。手と肩が触れ合える距離で仕事が出来ると楽しい。

石田 一緒にやりましょう。お金を出そうとは言えないが、情報は提供します。

——農業や植林は自然を壊しているのでは？

お金が無くなると、カトマンズで仕事をして稼ぎ、山に戻る。するとこの日本人は、お金をしょってきた人とはちょっと違うと、村の人達が無料奉仕を始め、水道が完成した。だが、僕はもうぼろぼろだった。失敗ばかりしていた。ネパールでなにかやる。はっきり言って難しい。あの世界で生きるにはあの世界の法則があり、日本人の価値観で入ると、逆に摩擦が起きて、最後は追い出される。

個人的に援助というのをすっかりやめた。僕の能力ではなんにもできない。それで子供たちをネパールへつれて行った。人間は地球の声を聴くレシーバー。地球への問いかけがしやすいヒマラヤで、なにかすることが若い人の1つの表現方法になればと思う。

ネパールの街道筋に、木が植わり休む所がある。30歳代の「おばあさん」が座っていて「死ぬ時がきました」と言った。素敵な命の終わり方だと思った。生きることを数量で計るのでなく、感覚的に100年、200年生きる。今、そんなことを考えている。

樋田 原理的には同感だ。我々が自然から生きるための物を取ると必ず自然を変える。これは必然で、問題は本当に生きるためにか、操作された欲望のためにするかだ。どこまでつましく生きるかだ。草木のはえない所に草木を広めていくことからは、けなげな努力として何かを学べる。

石田 農耕をやりだした頃から自然破壊をしている。農学部の者として、自然保護という言葉は嫌いだ。自然農法では現在の人口はやしなえない。ただ、化学肥料、農薬づけの農業は何か飛び越してしまったのではとも思う。

——アラルの開発の住民への影響は？

石田 約5万トンの漁獲は零になった。砂嵐で産業もなくなった。平均気温も2度変わった。豊かになった分より被害の方が多い。

深尾 関連して、中国では国家プロジェクトも進んでいるし、地域の民間の植林もある。それぞれ効果があるが、地域の方が住民に根ざしている。

〈次頁につづく〉

稻村 ネパール・ムスタンの森林破壊が進んだのは、国境が整備され遊牧民が中国に行けなくなったことにもよる。国連の植林は失敗し、廃墟だけになった所も多い。その怖さをかみしめて行わないといけない。外国からの指導員が3年ぐらいで結果を出そうと、肥料をいっぱい入れて収穫を上げる。2千年の歴史があるネパールの農業を3年で語る。そんなバカなことが多い。

—中国で大規模な植林が進んでいる所がある。一見、プランテーションのように見える。でも、現地の人が生きるためにやろうとしていることを我々ビギナーは尊重するべきだ。森がな

くなり食べられなくなると住民が外に出て、日本にやって来ることになる。我々自体の問題だと考えるべきだ。

—加害、被害の問題として、当事者性をどう考えているのか

石田 逆に質問したいぐらいの難しい問題だ。日本の大学で飯をくっている人間として外に対し何が出来るのかを模索する作業を続けたい。

深尾 ある所へ行っても自分は飛行機で帰ってくる。そこに住む人と問題を共有しながら、まったく立場が違う。自分の位置の中で何が出来るかをジレンマの中で考えるしかない。

稻村 どこで生きるも一生よ、と考えている。

梶田 自分が非力、無能とつくづく思う。自分の生きることに責任を持つしかないが、問えば問うほど責任が持てないという事実に打ちのめされる。生きるために必要以上のものを、欲望奴隸になって得ている。それが世界の人たちの生活を破壊している。だから、何かをしてやろうと外国に行くのは傲慢になる。教えてもらいに行く、自分の足元を確かめる参考資料を得るために思うべきだ。自分の欲望をどれだけ制御出来るのかということに、むなし抵抗を続いている。具体的に言えば、食うものを少なく、なるべく遠くに行かず、争わず、というふうにありたい。

今回のシンポジウムにたいする参加者のアンケートが多数寄せられました。ごく一部ですが紹介させていただきます。

●最初はぜんぜん意味がわからなかつた。けどみんなが出しあう時いろいろ聞いて私は世界の人が仲良しでそして楽しく、そして本当に必要なぶんをたべて、そしたら緑のおおい地球になり、すみやすい世界になると思ひます。そんな世界にするのは一人一人自分自身だと思います。

(高校生 16歳 女)

●環境問題を考えるとともに、北とか南とかの二元論的にとらえるのではなく感覚でもってとらえるには、現地に接することが必要なのだと感じました。

(予備校生 18歳 男)

●生態系の復活が必要であるが、生態系破壊の原因をつきつめることも大切ではないか。

(会社員 27歳 男)

●上下水道が完備され、アスファルトの土で生きている私たちが自分たちの地域においてどう自然と関わり、どう自然を守り、共生していくのか。最近疑問に思うことです。

(郵便局員 29歳 男)

●自分の身近な地域で住みやすい環境をつくっていきたい。

(会社員 35歳 男)

●地球がアブナイという危機感は、会場に来た人々は、多少なりとも持っているかと思います。きっかけがな

く、どうしよう、どうしようという状態なのだと思います。自分で自ら動けない者として、まずお金ぐらい出しましようかと思います。

(会社員 41歳 女)

●10年自分が活動し、その後を引き継ぐ若者を育てるのもほんとうに大切な事だと思いました。今、自分にやれる事をやり、後をみていく若者、教育問題が重要。若者の参加が多かったの

が心強い感じがした。(43歳 女)

●カザフスタン・ネパール・中国の問題が少し分かりました。GENのしようとしていることの方向を示したものでしょうか? 政府や企業に対する批判や注文をもっと聞かせてほしかった。それと、日本の公害問題をどうするのかも知りたかった。特に梶田さんの話をもっと聞きたかった。

(教員 54歳 男)

93年黄土高原緑化協力団 4月27日に出発 今年の緑化協力の具体化にむけて

93年の黄土高原緑化協力団が4月27日から5月7日まで、山西省雁北地区を訪れ、ことしの協力を具体化します。

参加するのは、清田祐一郎(团长)、河上四郎(副团长)、森井常雄、吉廣光正、草陽一、田中良、橋爪新太、弘世正男、森井正人、高見邦雄(秘書長)のみなさんです。男ばかりになったのは残念ですが、ユニークな顔触れで、これまで2回のミーティングをつうじて相互の理解もふかまり、あとは出発を待つばかりとなりました。

昨年から協力を開始した渾源県との関係を深め、さらに共青団雁北地区委員会がすすめる桑干河青年森林プロジェクトとの協力を具体化することになります。10人の団員には、環境問題と農業の技術者、ジャーナリストなども

黄土高原緑化サマーワーキングツアー・参加者募集

期間／7月29日～8月16日

目的／中国山西省の黄土高原での植樹と地元住民との交流等

費用／15万円くらい

(旅費その他全ての費用を含む)

募集人員／先着20名まで

締切／5月20日ごろまでに申し込んでください。

●申し込み先／緑の地球ネットワーク ウーキングツアーリー

☎06-583-1719

ネパール緑化協力考察団 5月26に出発 アジア自然塾の人々とともにムスタンへ

緑の地球ネットワークでは、かねてからネパールでの緑化協力の道を模索してきました。何度もネパール各地訪問やキー・パーソンズとの話し合いを重ねて、最大の重点をムスタン地方に置くことになりました。

ネパールでは、最近の急速な森林消失によって、全国土からの水土流失の危険が増しています。農業がもつとも主要な産業ですから、資源マルごと失われていっているといつてもいいでしょう。またもつとも主要な燃料源の危機にもつながります。ネパール全土どこでも、植林は緊急に、しかも末長く求められています。とりわけ、自然環境が厳しく、それゆえに脆い高山岳地帯では、植生を失うことは生存条件の急速な衰減に至りかねません。

カリ・カングキ河流域のムスタン地

方はそのようなところです。ネパール中央部の都市ポカラを基点に、降りしきるモンスーンの中の道行きとなります。途中、1000m-3000mの棚田が続く丘陵地帯、谷沿いの道をたどって、4000mに達するムスタン奥地まで片道15日の徒歩行。多様・多彩なネパールの風土に接し、土地の人びとの生活ぶりの一端に触れながら、緑化協力ネットワークに着手したいと思います。

ムスタン全域への緑化協力の展望をもって、まずはカナメとなる良好な苗場を、村の人びととともに建設することからはじまるでしょう。

アジア自然塾（稻村昭南塾頭）の4人の方々との協働。ともにネパールに滞在する42日間のうち35日間は歩き続けるという強行日程にならざるをえませんが、村の人びとの凝縮した協議



ネパールの農具

の時を得ることができるでしょう。

【緑の地球ネットワーク・ネパール緑化協力考察団】

喜多亮夫、高力憲子、奥村恵美子、森脇久子、東間徹、佐野茂樹

（出発 5月26日 帰国 7月25日）

山西省の自然

石原忠一
(第一次緑化協力団団長)

⑨黄耆(おうぎ)



神農は、中国民衆の伝説の中で、はじめに農業を教え、又“赤い鞭で草木をうち、百草の滋味をなめて一日に七十毒にあう”と語られ、本草医学の神として崇敬されています。

昨年の今ごろ、リオデジャネイロでの地球環境サミットをまえに、舞台裏での激しい攻防がつづっていました。ブッシュ前大統領は、選挙戦のまつだなかでしたが「生物の多様性の保全条約」の調印を拒否し、発展途上の国々の非難を集めていました。米国内の企業は、アマゾンなど熱帯雨林の

先住民が利用していた、さまざまな生物を持ち帰って、研究室で新薬の開発にうちこんでいたのです。

183カ国の首脳が集まって6月14日採択した条約には「遺伝子資源を提供了した国に対してその資源を使用した生物学から得た利益を還元すること」と明記されています。生物には未知な領域がいっぱい残されているのです。

さて山西省は、渾源県を中心に野生する黄耆

は豆科のレンゲソウ属の多年生草です。（この属は双子葉植物の中では最も多くの種を分化させて、1500種を数えることができます。日本の高山のがれ地にあるタイツリオウギも近縁種です）黄土地帯に適応して、主根が太く長く分岐ないので、栽培もすすみ、古来強心、強壮、利尿等に利くので高い経済性があります。

道教の思想にみちびかれた妙藥黄耆は、生薬の国際市場でも高い信頼を得ていると言われます。

黄土高原の現状 を講演会で紹介

「黄土高原に緑を！」——自分たちの協力できることはなんだろうか。国際ソロプチミスト奈良・あすか・平城・いこまの4クラブ合同の講演会が、4月7日午前、奈良県女性センターで開かれ、GENの高見世話人が参加しました。

90名近い会員の出席のもと、環境奉仕委員会の河村良子さんの司会ではじまり、「地球的な規模で環境破壊がすすむとき、未来の世代に美しい地球を伝えていくことが私たちの責務だ」という岡村昭子さんの挨拶がありました。

高見世話人は、写真パネルを示しながら、黄土高原の厳しい自然環境、貧困だけれどもゆとりの感じられる生活、たいへんな勢いですすめられている森林再生などを1時間ほどで紹介しました。「日本とのあまりのちがいにびっくりした」「地元の人たちがそれほど熱心なら協力もいけるだろう」「ものの豊かさだけを求めて、私たちはたいせつなものを置き忘れたようと思う」などと、熱心な質問や意見がつづきました。

「会としても可能な協力をすべきだけど、個人としてもGENに入会したい」という積極的な受けとめをしていただき、ほんとうに勇気づけられました。

春の山林で快い汗 —ヒノキ林の間伐体験

4月11日、河内長野市の延命寺そばの山林で、「自然と親しむ会」はヒノキ林の間伐にとりくみました。最初に山主の森下寛さんから、森林はすべての人びとにきれいな空気・水・憩いなど多面的な効果をもたらしている、ところが日本の林業は経済的になりたくなっている、林業にたいする新しい見方・対処が必要になっており都市生活者もぜひ林業の現状を知ってほしい、というあいさつがあり、段取りの説明のあと、具体的な作業にはいりました。

植林後20年ほどたったヒノキ林は光もさこまないほどこみあい、大きな竹がはいりこんで、ヒノキの成長を阻害しています。チェーンソーで切り倒されたヒノキや竹をノコギリやオノで

枝打ちし、適当な長さに切り、急な斜面を下まで運び出しました。ほとんどの参加者がはじめての山しごと、ちょっと動いているうちに汗が吹き出します。

弁当を食べながら、山しごとのいろんな体験を聞きました。一休みすると、あちこちで鳴いているウグイスの声が聞こえます。足元にシュンランの花が咲き、つぼみをもつたカタクリやササユリがあります。

楽しみにしていたタケノコは、時期がちょっと早かったのか、1

本もみつかりませんでした。でも間伐材を持ち帰って学校の花壇のクイをつくったり、竹の筒でGENの募金箱をつくったりしています。

さいわい心配していたケガもなく、慣れないしごとで翌日はからだの節々が痛かったけど、自然のなかでの疲れはほんとうに快い疲れでした。



繁茂した竹を伐り倒す。竹の子がなかったのが残念。

中高生 800人を前に植林体験を語る

加茂わかな(大学生)

係のサークルも同時に紹介してほしいとのことなので、その代表者と2人でいかが、と。大学側からの依頼なので引かず、何も考えないままに気付いたら引き受けさせていた。

おそらく依頼側は、最近何かにつけて地球環境問題が取りざたされる中で、中高生にも何かしら、その方向での問題意識を与えてくれることを望んでいたのかもしれない。しかし、残念ながらまだ私は植林活動の意義や効果などについての考えをまとめられずにいたし、十分に認識することもなかった。ましてや経験を美化したり、誇張した

りして、人を触発するようなことはしたくなかった。

そのようて分割した思いでながらも、感じたことをそのまま口に出そうと覚悟(?)し、当日を迎えることになった。不幸にも、もう片方の人が前日に高熱を出してしまって、一人で二人分の時間を請け負うことになったが、もう不思議と不安はなくなっていた。

今振り返っても、3~4人相手で口ごもってしまう私が、当日、生徒や先生方800人近くを前にして、何を語ったかあまり思い出せないでいる。ただ、強烈に覚えているのは、話を終えた後の喉がひどくかれていたのと、先生の「加茂さん、時間オーバーですよ」という声だった。

がんばりましょう。(東川貴子)

●『緑の地球』4月号の発行が大幅に遅れてしまいました。私事になりますが、身辺が慌ただしく、なにかと雑務におわれ、気がつけば5月が目前というありさまで、顔面蒼白になっています。編集体制を再度強化する必要がありますので、興味のある方はぜひスタッフになってください。連絡をお待ちしております。(林)

編集後記



●シンポジウムで植田さんはお金と物に振り回されている欲望奴隸から脱皮しようと言った。そうだと思う。だが造花卸業の経営側にい现实

の自分。新製品をどんどん提供し購買欲をあおる、販路を広げ売り上げ増を図る。そうしないと社員の給料も上げられないし、小さな会社は生き残れない。どう折り合いをつけるか、考え続けている。(岡田光司)

●大阪城公園の満開の桜を横目に、ピースおおさかにご来場下さった皆さんありがとうございました。GENの活動が長く続けられるよう、これからも